

みんなの水泳……日々徒然

『2020東京に向けて…おさらい徒然… ～競技規則やルールエクセプション～』

はじめに

前回は、昨年9月に神戸で開催された日本身体障がい者水泳選手権大会や10月にマレーシアで開催されたアジアユースパラゲームズ2013マレーシアで感じたことをお伝えしました。

今回は、前回に引き続き、「2020東京に向けての課題」として、競技規則とクラス分けの理解について、おさらいを兼ねてお伝えしたいと思います。

競技規則について

障がいのある人の水泳競技規則には、『障がいゆえにできないこと』で違反とならないように、本来の規則を緩和したり、その障がいのある選手を救済する規則がありますが、競技会の成り立ちなどに起因して、国内の主要大会において競技規則やクラス分けが少しずつ異なるのが現状です(近年は少しずつ共通点が増えてきていますが)。

また、水泳競技では、クラス分けと競技規則が密接に関係しているのも特徴と言えるでしょう。指導者は、競技会出場に関する知識と考えを整理しておき、指導する選手の障がいやクラス、付与されたルールエクセプションと関連する競技規則をよく理解して、日頃の指導に活かすことが重要です。

例えば、ジャパンパラ大会で採用されているIPC Swimming(国際パラリンピック委員会水泳部門)の水泳競技規則には、次のような規則があります。

・緩和事項の例

平泳ぎ: スタートおよびターン後、片脚あるいは両脚で壁を蹴ることができない場合は、うつ伏せになるために、同時でないまたは水平方向でないストロークを一回行なってよい

バタフライ: S11とS12にクラス分けされた視覚障がいの選手は、ストロークサイクルにおいて、コースロープにかかって両腕を同時に前方に運ぶことが難しい場合に、有利さを得ることがないときは失格とならない

両者とも、一般の水泳競技会では泳法違反となります。

ルールエクセプションについて

ルールエクセプションコードは、障がいゆえにできないことを理由に選手を失格にしないためのもので、個々の選手についてクラス分けの際に判定され、選手ごとに付与されます(知的障がい選手は基本的にルールエクセプションなし)。

いくつか例を挙げてみます。

・ルールエクセプションコード「1」

背泳ぎの競技規則では「……両手でスターティンググリップを持つ。……」と記載があります。障がいやその程度によって片手で持つことが妥当な場合には、「1」というルールエクセプションコードが付与されます。この場合、スターティンググリップを両手で持たなくても、それを理由に失格になることはありません。



(下肢にも欠損がありますが) 左上肢が欠損していますので、右手のみでスターティンググリップを握ります

・ルールエクセプションコード「F」



フィートスタート: クラスS1~S3のみに付与されます。壁に足を付けた状態からスタートする。勢いをつけることは許されません

「F」はフィートスタートを意味します。この「F」はクラスS1~S3までにしか付与されません。このように付与するクラスが限定されているようなものもあります。

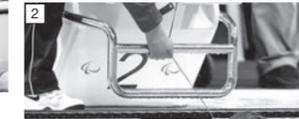
以下にルールエクセプションの一覧をまとめてみました。

ルールエクセプション一覧

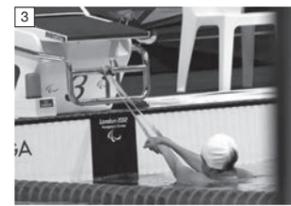
- W - WATER START (水中からスタート)
- F - FEET START (フィートスタート) ※S1-S3のみ
- H - HEARING IMPAIRED LIGHT OR SIGNAL REQUIRED (聴覚障がいを重複しているのでライトやジェスチャー必要) (写真①)
- Y - STARTING DEVICE (スターティングデバイス: スタートの際に介助器具を使う) (写真②③④)
- E - UNABLE TO GRIP FOR BACKSTROKE START (背泳ぎ時にスターティンググリップを握ることが機能的にできない)
- A - ASSISTANCE REQUIRED (スタートや入退水時に介助必要) (写真⑤)
- T - TAPPERS (タッパー必要)
- B - BLACKENED GOGGLES (不透明のゴーグルの着用が必要) (写真⑥)
- G - PROTHESIS/GLASS EYES (装具または義眼を装着している)
- P - PROTESTED (プロテストによる再クラス分け処理済み)



フィートスタートですが、スタート台上にライトが配置されています。聴覚障がいを重複している選手には、ルールエクセプション「H」が付与され、このようにライトが配置されます



この写真の選手は「ひも」を使用しています。他にも「タオル」をスターティングデバイスとする選手もいます。



前腕に麻痺がある選手です。ベルトに手首付近をかける形でスタートします



前腕に麻痺があるようですが、この場合にはスターティンググリップの角度と高さをアレンジするためのスターティングデバイスだと思われる



スターティングデバイスを使わずに、このようにスタッフが支えるスタート助動選手もいます。この場合には「A」が付与されます



レース後に競技役員による「ゴーグルチェック」があります。「見える」と判断されると失格になる場合もあります

0 - NIL (なし)

- 1 - ONE HAND START (片手でスタートする: 背泳ぎ) (写真⑦⑧)
- 2 - RIGHT HAND TOUCH (右手で片手タッチ: 平泳ぎ/バタフライ)
- 3 - LEFT HAND TOUCH (左手で片手タッチ: 平泳ぎ/バタフライ)
- 4 - RIGHT HAND TOUCH WITH SIMULTANEOUS INTENT TO TOUCH WITH OTHER (両手での同時タッチの意思を見せながら右手片手タッチ: 平泳ぎ/バタフライ)

アスリートとして…

先般、車椅子バスケットボール事業に携わる機会がありました。海外から女子代表チームを招き、1週間の滞在のなかで日本女子代表チームとの練習や親善試合、地域での交流会、障がいのある子供たちへのバスケットボールレッスンなどを実施する、盛りだくさんの内容でした。

感心させられたのは、選手たちの姿勢です。練習で疲れている

5 - LEFT HAND TOUCH WITH SIMULTANEOUS INTENT TO TOUCH WITH OTHER

(両手での同時タッチの意思を見せながら左手片手タッチ: 平泳ぎ/バタフライ)

6 - SIMULTANEOUS INTENT TO TOUCH (両手での同時タッチの意思を見せながらタッチ: 平泳ぎ/バタフライ) (写真⑨)

7 - PART OF UPPER BODY MUST TOUCH (上半身の一部でのタッチ) (写真⑩)

8 - RIGHT FOOT MUST TURN OUT (右足は平泳ぎの正規のキックでなければならない: 平泳ぎ) (写真⑪)

9 - LEFT FOOT MUST TURN OUT (左足は平泳ぎの正規のキックでなければならない: 平泳ぎ)

12 - LEG DRAG OR SHOW INTENT TO KICK (平泳ぎキック動作せず両脚を引きずる、または、正規の平泳ぎキックを行う意思を見せながらキック: 平泳ぎ)

+ - BUTTERFLY KICK IS ABLE TO BE PERFORMED [BREASTSTROKE] (バタフライキック能力あり: 平泳ぎ)



一見「両手で」スターティンググリップを握っているかにも見えますが、これもワンハンドスタートです。片麻痺の選手などで麻痺側の握力が弱い場合などワンハンドスタートが付与されます



このように上肢を前方に伸ばしても頭部より先に出ない場合に、ルールエクセプション「6」が付与されます



障がいのない脚については正規のキック動作が求められます



両上肢欠損の場合や両上肢が短く、伸ばしても頭より先に手が出ない場合などは、上半身の一部でタッチすることが認められています

であろうなか、寒さ厳しい学校の体育館での地域交流会やメインマッチ直前のバスケットボールレッスンにも、笑顔で自らも楽しみながら積極的に参加してくれるのです。

アスリートとして、自分の競技の魅力を自分たちでしっかりと伝えていく、次世代に自分たちからメッセージをつなげていく、そんな姿勢が見てとれました。他の競技でもこんな光景が「当たり前」になるといいなと感じました。